Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-12-27

「地域に根ざす教師」という教師像 : 船寄編『近現代日本教員史研究』を読んで改めて考えたこと

船越, 勝

(Citation)
歴史のなかの教師像と教職意識 : 船寄俊雄・近現代日本教員史研究会編著『近現代日本教員史研究』を手がかりに

(Issue Date)
2022-05-15

(Resource Type)
conference object

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009274

日本教育学会近畿地区企画「歴史のなかの教師像と教職意識」　　２０２２．５．１５

「地域に根ざす教師」という教師像

ー船寄編『近現代日本教員史研究』を読んで改めて考えたことー

和歌山大学教育学部　船越　勝

はじめに

・日本の教育実践史、日本教員史における「地域に根ざす教師」という教師像の位置

・本書において船寄が注目している寺崎の問題提起

「近代日本の国家と社会の中で歴史的に作られたものとしての教師像を明確に視野におくことによってはじめて、その教師像を作り出したものの側の論理を対象化し、その論理自体の含んでいる矛盾を明らかにすることができるのではないか」（寺崎昌男編『近代日本教育論集６　教師像の展開』国土社、1973 年）

→本書４頁

・「国家と社会の中で歴史的に作られたものとしての教師像」というとらえ方

教師　教員に関する政策・制度のなかで養成される存在としてのとらえ方

↓

「その論理自体の含んでいる矛盾」への着目が重要

教師　「国家と社会の中で歴史的に作られたものとしての教師像」に抗い、自らが向き合っている子ども・保護者・地域住民の要求に向き合い、それに誠実に応答しながら、その矛盾について共々に考え、主体的に展開していった教育実践や教育運動のなかで、教師自らが自己形成していった教師像を大切にしたい

典型例　日本の教育実践史、日本教員史における「地域に根ざす教師」像

戦前　大正自由教育、郷土教育運動、生活教育運動、生活綴方運動など

戦後　コア・カリキュラム運動、民間教育研究運動、高度経済成長に抗う教育実践など

＊国家の教員養成によって育てられる教師との教師の自己教育運動によって育まれる教師

＊管見では、「地域に根ざす教師」がどのように形成されて来たか、日本の教員史研究において必ずしも十分検討されてきたわけではない

・本書において注目されている教師像は、明示的に示されているわけではないが、いずれもこうした「地域に根ざす教師像」ではないか。

例えば、戦後新教育の時期は言うまでもなく、高度成長期の競争主義的教育政策に抗った教師として取り上げられている岸本裕史や能重真昨にしても、地域との密接な連携・協働の中で教育実践を展開していた。

岸本裕史　百ます計算に代表される教室の中で行われる基礎学力（学力の基礎）の保証する教育実践を展開した教師として見られている。

↓

教育科学研究会の「教育と政治」部会に長年所属し、長年能力主義政策の問題点を批判し、国民の教育権の視点から、求められる教育のあり方を探っていた。

その具体的な姿として、教室における教育実践だけでなく、保護者と連携・共同し、地域における「家庭塾」の運動を組織して、国民の自主的な基礎学力保障を追求した。

能重真作　学校における生徒の非行・問題行動を克服する教育実践を展開した教師として見られている

↓

だからこそ、非行・問題行動を克服するために、保護者や地域住民・様々な専門家との連携・共同を追求する教育実践を行った教師でもあった

また、新自由主義の教育政策に抗った教師として取り上げられている金森俊朗、徳水博志などは、典型的な「地域に根ざす教師」だと評価できる。その「地域に根ざす教師」としてのあり方、すなわち、その教師像は後で検討する。

その際、「地域に根ざす教師」像は、金森俊朗や徳水博志に代表されるような自然か今日の豊かな地域で教育実践を行った教師に限定される概念ではない。

岸本裕史や能重真作のような都市部で教育実践を展開した教師もまた「地域に根ざす教師」として、地域と密接に連携・共同した教育実践を展開した教師として見なされる必要がある。

・では、なぜとりわけ高度成長期以降、自覚的な教育実践を展開した教師たちが「地域に根ざす教師」にならざるを得なかったのか？

地域の子どもや保護者に向き合い、彼ら・彼女らとともに教育実践を展開した教師が出会ったもの

高度成長期　地方の人口流出による過疎化と都市の人口流入による過密化の問題
企業社会の成立と能力主義的な教育政策による「学校から落ちこぼれると人生からも落ちこぼれる」という競争意識の発生
こうした状況に呼応し、展開された保護者の「下からの『能力主義』」（竹内常一）

新自由主義政策期　さらなる競争主義によって、格差化と貧困化が進行し、地方の放棄・投げ捨てと、都市部での地域における格差化・棲み分け（ゾーニング）が進行した。

だからこそ、こうした子どもと地域の現実に出会い、「本物の教育」を求めた自覚的な教師と保護者は、連携・共同して教育実践を展開し、そのなかで教師は「地域に根ざす教師」に自らを自己教育していかざるを得なかった。

・現代における「地域に根ざす教師」の成立可能性と困難
　教員養成政策の統制強化
　教師の多忙化と仕事の業務化
　学校マネジメント政策などによる教育実践の自由の制限など
　　＊こうした状況のなかで、そもそも「地域に根ざす教師」は存在することは可能か、
　　また、大学で「地域に根ざす教師」を育てることは可能か！？

１．今日の大学における教員養成の状況と「教職意識」
（１）今日の「教職意識」と「２００９年型教職観」
　①慢性的な疲労と「やりがい意識」
　②「２００９年型教職観」とは
　　・仕事と私生活を切り離して割り切る
　　・教師としての自分の仕事の範囲を限定する
　　・管理職の指導のもとで
　　・学力向上という学校の組織目標の実現に向け励む（教職の矮小化）
　③同僚との「共同歩調志向」
　④専門職としての自律的教師から、身分的・経済的に保障された教育公務員であること
　　とに自己肯定感と生きがいを感じる

（２）今日の「教職意識」のあり方をどう見るか
　①「２００９年型教職観」の背景にあるもの
　　・長時間のサービス残業の日常化
　　教師の過労死事件
　　「働き方改革」が政策的に要請されるような事態の進行
　　・職務限定の必要性と教育実践の論理
　　・「チーム学校」政策と教員評価、成果主義の導入
　　・学校の組織目標をどのように設定するか
　　PDCA サイクルの評価
　②教員だけでなく、日本の労働環境の劣悪さが背景
　　コロナ禍以降より顕著に

（３）大学における学生の「教職意識」と教員養成の実態
　①教育労働の困難な状況についての認識の広まり
　　教育学部の入試倍率の低下
　　教員採用試験の倍率の低下

　②教育学部の学生の二極分化と「教職意識」
　　教員志望意識の低い学生
　　コロナ禍以降、身近な地元の国立大学へ
　　不本意入学と教育学部のミッションとのミスマッチ

割の合わない仕事としての「教職意識」

教員志望意識の高い学生
「真面目さ」と教員採用試験への準備
教師に政策的に求められている仕事を「こなす」という意識
教育実践の創造性の喪失と教師の仕事の業務化
専門職としてやりたいのではなく、「しなければならない」ことというとらえ方

③学生の「教職意識」の開花の契機となる教育実習や各種ボランティア活動の制約
コロナ禍での教育実習などの中止や短縮化、様々な制約の導入

④教師としての土台を育む自主活動の状況
学生自治会の活動の低調化
コロナ禍での部活動・自主活動の制約
実践家としての教師のボディ（文化としての身体）の獲得のチャンスを失う

⑤大学における教員養成の実態
・教員養成コアカリキュラムへの統制の強化
学習指導要領への対応
シラバスチェックの徹底と事後評価
・コロナ禍でのオンライン授業の増加

２．金森俊朗と徳水博志に見る「地域に根ざす教師」像の成立
（１）教師としての金森俊朗・徳水博志との出会い
金森俊朗　日本生活教育連盟、会員制教育研究所交流集会など

徳水博志　全国教育の集い生活科・総合学習分科会、日本生活教育連盟など
＊ともに教室訪問の機会も得られた

（２）金森俊朗における「地域に根ざす教師」像の展開
①金森俊朗の生育史
１９４６年　石川県能登（中島町）生まれ
生家は大きな家畜飼育農家（牛、豚、ニワトリ、アヒルを飼育）
頑固で本好きな親父
少年時代
ガキ大将
海・山を駆けめぐる

②大学時代

金沢大学教育学部卒業
日本の生活教育研究のリーダーの一人である中野光氏（教育学者、金沢大学から後に立教大学、中央大学）に師事
「全国教育系学生ゼミナール」北信越ブロック中央事務局長

③教員時代
小松市立那谷小学校、金沢市立大徳小学校、南小立野小学校、西南部小学校を初め６校で勤務、退職後、北陸学院大学教授。2020 年逝去。
２０代後半から５６歳まで研究主任をほとんどやり続ける
日本生活教育連盟会員
市民運動への積極的な参加（ブナ林を守る、ホスピスの運動など）

④「いのちの授業」のカリキュラム
・「心をひらき仲間とつながる」学習
日記　→　朝の自由スピーチ、班日記　　→　手紙ノートと心のリレー
川での飛び込み
花いちもんめ、騎馬戦、おしくらまんじゅう、エスケン
どろんこサッカー
友だち、山、川、土、水、どしゃぶりなどとのボディ・コミュニケーション
・「いのちの、でっかいつながり」の学習
チョウの一生　生と死の世界との意識的な出会い
ニワトリのいのちを絶って食べる
いのちを奪っていることへの不感症
いのちを奪っている私たち自身と奪われている生きものたちに自覚的に向き合う必要
・私たちを誕生させてくれた「いのちのリレー」の学習
誕生のルーツといのちのリレー
自分、兄弟、父、母、祖父母それぞれがどうやって生きてきたか、どうやって誕生した　か、家族への聞き取り調査をする
いのちの誕生までのドラマ
赤ちゃんをみごもったお母さんを招く（佐々木嘉子さん）
「私の個性・人体図」の学習
・一人ひとりの生き方・生き様の学習
末期ガン患者が「死」を語る（泉沢美枝子さん）
・家族の死と死者が残した贈り物の学習
・いじめ・飢餓・戦争の学習ーいのちをめぐるミクロとマクロのポリティクスー

⑤「地域に根ざす教師」への金森の成長と「教職意識」
・幼少期の生活体験
・目指すべき教育観としての生活教育思想とサークルでの「地域に根ざす教師」との

出会い
・サークル活動・組合活動・市民運動などへの参加を通した組織的力量の獲得
・「いのちの授業のカリキュラム」からの必然性
いのち・くらし・生きがい・実生活へと広がる生活概念

（３）徳水博志における「地域に根ざす教師」像の形成過程
①徳水博志の生育史
１９５３年生まれ
大学卒業後、出版社に勤務。
３０歳を過ぎてから、教師になるにあたって石巻市に移住。
退職後は、NPO「雄勝花物語　雄勝ローズファクトリーガーデン」

②教員時代
文芸教育研究協議会に加入。新しい絵の会。
「関係認識・変革の文学教育」（西郷竹彦）を志向。
『森・川・海と人をつなぐ環境教育』（明治図書）出版
東日本大震災を体験

③雄勝の「復興教育」を通して
・ポスト３．１１で問いかけられているもの
命・暮らし・生きがいの収奪という生活の崩壊
ライフスタイルや教育、開発中心の地域政策の問い直し

④学力観の転換と再定義
・物知りな傍観者を育てる学力
・地域づくりの当事者を育てる学力の地平へ
・参加と共同の学力という視点

⑤授業づくりの転換と再定義
・３つの授業づくり像の対立
人類の文化遺産の伝達としての授業
文化創造への参加としての学びと授業
グローバルに開かれた、ローカルな知と文化の創造としての授業
・地域のモノ・コト・人との出会いとつながり合う学び

⑥学校づくりの転換と再定義
・学校と地域の関係の３つのタイプ
閉鎖的な学校づくり論
学校づくりのために地域が一方的に貢献するという構図
地域づくりのために学校が貢献する

「地域の復興なくして学校の再建なし」
・地域づくりのための学校へ

⑦地域づくりの転換と再定義
・地域をどうとらえるか
資源として地域
地域を地域住民によって歴史的に編み直され、創り出されてきた生活台であり、文化的拠点のことである
・地域に根ざした教育実践の二重性
方法概念としての地域概念
目的概念としての地域概念
子どもの地域づくりへの参加
目的・方法概念としての地域

⑧「地域に根ざす教師」への徳水の成長と「教職意識」
・文学教育を通した人間変革への志向と環境学習・総合学習への展開
・震災体験
・学力観・授業観・学校観・地域観の転換
・サークル活動・組合活動・市民運動などへの参加を通した組織的力量の獲得

（４）船寄の提起する「知の足腰の強い教職観」の先進性と卓越性
「知の足腰の強い教職観」とは
教師は教育に関する総合的知見の所有者＝専門職
・子どもをその存在まるごとはあくするということ
・子どもの生活背景を熟知すること
・子どもの生活背景を規定しているこの国の政治や経済の問題に関する識見をもつこと
・子どもの最善の利益を実現するために保護者や地域の人々とつながること
・授業力の向上に努め子どもたちに確かな学力を身につけさせること
・教育の専門職者としての自由と自律性を追求すること

（５）発表者の考える「地域に根ざす教師像」の「教職意識」の構造
①地域の生活台からの深い子ども理解（生育史と対他関係）
②地域の生活台についての熟知しており、そこに関わるのに必要な経験と技を持っている（モノ・コト・人）
③グローバル・ローカルの関連のなかで、学校と地域の政治・経済的構造と文化伝統について把握している
④子どもの学習権・生存権の保障と住民主体の地域づくりのために、学校の子ども・同僚・保護者・地域住民・行政と連携・共同ができる
⑤学校と地域の発展のために主体的に関わっていく「当事者意識」と覚悟

⑥地域の様々なモノ・コト・人とつながり、活用しながら、子どもの学びと生活を創造していく高い専門性と実践的・組織的力量
⑦教育・福祉と地域づくりの専門職としての専門性と自律性

（６）「知の足腰の強い教職観」と「地域に根ざす教師」像との比較
ーその共通性と違い
本物の教養の形成の今日的重要性
地域の文脈の位置付け

３．今日の大学で「地域に根ざす教師」は養成可能か
（１）学生の「地域に根ざす教師」への興味と拒否感
地域教材の開発の魅力
濃密な人間関係は苦手

（２）和歌山大学教育学部の取り組み
①へき地複式教育実習の取り組み
ホームステイ、地域体験を含む
②小規模校活性化支援事業
③応用実習
地域に根ざす教育実践を行っている教師の教室で１年間学ぶ
④社会教育主事（社会教育士）資格取得との連携
各種の自主活動への参加

（３）大学でできることとできないこと
地域づくりへの参加体験の重要性
あくまで自己教育運動という性格は大切に

おわりに
「地域に根ざす教師」を育てるために、学生・大学・学校・行政・地域のさらなる連携・共同を

主要参考文献
１）臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践ー戦国教育史像の再構築を目指してー』三恵社、２０１３年。
２）鎌倉博・船越勝編『生活科教育』ミネルヴァ書房、２０１８年。
３）行田稔彦・船越勝編『今だからこそ「子ども発」の学びをーバーチャルからリアルにー』新評論、２０２０年。
４）船越勝・深澤秀雄「岸本裕史のライフヒストリー研究（Ⅰ）ー基礎学力形成の教育実践の『定型』の成立過程を中心にー」『和歌山大学教育学部紀要　教育科学』第６８巻、２０１８年。

５）深澤秀雄・船越勝「岸本裕史のライフヒストリー研究（２）ー「見える学力・見えない学力という枠組のライフヒストリー上の位置ー」『和歌山大学教育学部紀要　教育科学』第６９巻、２０１９年。
６）深澤秀雄・船越勝「岸本裕史のライフヒストリー研究（Ⅲ）ー幼児教育と『見えない学力』の模索へー」『和歌山大学教育学部紀要　教育科学』第７０巻、２０２０年。
７）金森俊朗著『太陽の学校』教育史料出版会、１９８８年。
８）同『町にとびだせ探偵団ーおコメと水を探る』ゆい書房、１９９４年。
９）同『性の授業　死の授業』、教育史料出版会（村井淳志と共著）、１９９６年。
１０）同『いのちの教科書』角川書店、２００３年。
１１）ＮＨＫ「こども」プロジェクト著『４年１組命の授業』ＮＨＫ出版、２００３年。
１２）徳水博志著『震災と向き合う子どもたちー心のケアと地域づくりの記録ー』新日本出版社、２０１８年。
１３）同『森・川・海と人をつなぐ環境教育』明治図書、２００４年。
１４）大畑佳司他編『地域に根ざす教師』明治図書、１９８３年、他。